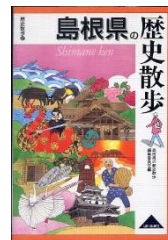




○石見銀山と温泉津の歴史

このところ原稿依頼も多く、また前回22号は教職員向けでホームページ等でも掲載していなかったため、久しぶりに校長室だよりを書くような気持ちになっているところです。

今回は、10月に本校2年生の研修旅行で行くことになっている石見銀山と、石見銀山からの銀の積み出し港となっていた温泉津について、少し専門的に紹介したいと思います。先日研修旅行の事前学習で関連資料を生徒に配付した時に少したけ石見銀山の歴史について話す機会がありましたが、その続編です。



1552年頃と推定される書状に、石見銀山に「市町見世棚」の存在が確認できます。つまり、石見銀山は町として見世棚、つまり商店が立ち並び、市が開かれるほど賑わっていたことがこの書状から窺えます。

石見銀山の開発がはじまったのが1526年頃で、いわゆる灰吹法とよばれる精錬技術により銀が増産されるようになったのは1533年頃です。その後、山口の大内氏、出雲の尼子氏、川本の小笠原氏が銀山をめぐる争奪戦を繰り広げたのち、最終的には毛利氏が石見銀山を直轄地としたのが1562年です。その後豊臣秀吉が毛利氏を服属したのが1584年のことです。この頃には、世界的にも石見銀山の銀が有名になっています。町の賑わいは、銀山の開発と比例して、争奪戦を戦国大名が繰り広げる中でも進んでいたと推察されます。それだけ、人や物が集まる場所であったのでしょう。人口は最大で20万人とも伝わります。今は400人ほどです。

毛利氏にとって、石見の制圧は、石見銀山奪取と邇摩郡制圧(積み出し港としての鞆ヶ浦や温泉津の支配)の意味で最重要であったことは言うまでもありません。毛利氏の石見制圧は1556年頃からで、毛利氏の家臣が銀山に出かけた記録も残るので、石見銀山を一旦は支配下に治めたと思われます。翌年には海上から温泉津へも進出しています。毛利方の吉川経安に、川本の小笠原氏攻めがうまくいけば、恩賞として与える所領が確定するまで、温泉津での船の通航料収入の一部を当面与えるとした記録が残っています。当時すでに積出港として発展しており、船の通航料収入もかなりであったと推察されます。

しかし、その後石見銀山を再び尼子方が奪取して、本庄常光が山吹城主となりました。しかし、その後本庄常光が尼子方から離反した結果、石見国制圧が6年余を費やして終わりました。そのため直轄領となったのが1562年です。毛利氏はその後雲南を通り出雲に侵攻し、尼子氏を攻め1566年に滅亡させています。

温泉津は、石見で唯一の毛利氏が直轄する関所であることも古文書等から確認できます。1565年には、石見から出雲へ兵糧米輸送をする船に対し、温泉津での通航料免除を認め、そのことを温泉津奉行人に伝えています。温泉津奉行が、温泉津に入港する船の通航管理や勘過料徴収に関与していたことがわかるもので、毛利氏がこの頃には温泉津に奉行を置いて、港湾支配を進めていたことがわかります。

温泉津の町には、仙崎屋、木津屋、小問氏などの商人がいたこともわかっています。仙崎屋は遠隔地貿易も手掛け、木津屋は温泉津奉行に大金を貸すほどの力を持ち、小問氏は問丸(運送業・倉庫業などを手がける業者)も営んでいました。細川幽斎(その子細川忠興が明智光秀の娘ガラシャと結婚)が、1587年に温泉津へ立ち寄り宿泊した時の様子が、信憑性は疑わしいものの史料として残されています。この時細川幽斎と歓談した温泉津商人として、油屋・蕨屋・奈良屋・木村屋・高津屋など多くの商人が記されています。

長篠の戦いがあった1575年に薩摩の戦国大名であった島津家久一行が京からの帰りにわざわざ日本海ルートを進み、温泉津に立ち寄った時にも、そうした豪商のいる港町としての一端が窺えます。彼の残した日記「家久公上京日記」には、温泉に入ったとか、芸能集団(お国歌舞伎の原形とも言われる)が来ていたので見物したとか、旅館に宿泊したことが記述されていて、多数の船が来て栄えた温泉津の賑わいが窺えます。

生徒に配布した資料には、石見銀山やその積み出し港である温泉津が栄えていたという歴史の事実が淡々と書かれていますが、その根拠となっているのはこうした古文書(書状)からわかる当時の状況を積み上げていながらわかってきた事実です。歴史は、覚えるものでなく、その事実から何を学び今に生かすかを、研修旅行を通じて考えてもらうことで、ふるさとの歴史や地域の課題や現状にも思いをはせてもらいたいものです。